

フラナリー・オコナーの初期作品再読

渡 辺 佳 余 子

Flannery O'Connor (1925-1964)は、"The Fiction Writer & His Country"というタイトルのエッセイで、自らの創作する姿勢について次のように述べている。

.....I am no disbeliever in spiritual purpose and no vague believer. I see from the standpoint of Christian orthodoxy. This means that for me the meaning of life is centered in our Redemption by Christ and what I see in the world I see in its relation to that.¹⁾

(下線、筆者)

このように、「キリスト教の正統な立場から世界を眺める」と、信仰の強さを明言しているオコナーは、その姓に示唆されているようにアイルランド系移民を先祖にする家庭に生まれた。カトリック教徒の両親のひとり娘で、カトリック教徒として育てられた。彼女の信仰の強さは、後年、作家として有名になり各地で講演した折などにも、地元の教会に通い礼拝を欠かさなかったという逸話にも示され、敬虔なカトリック教信者であったことがうかがえる。

そのためか、オコナーの全短篇小説や2つの長編小説は、キリスト教色が濃いといえる。しかし、彼女が生まれ育った、バイブル・ベルトと呼ばれるアメリカ南部のジョージア州では、オコナー一家のようなカトリック教信者は少数派であり、多くは南部根本主義と言われる土着のプロテスタント信仰が主流であった。さらに、オコナーは、自らが信仰するキリスト教を全面に出して作品を描いても、プロパガンダ小説のように魅力に欠けるものになると危惧していたように思われる。何故ならば、オコナーは、彼女が暮らす南部ジョージアの日常の場面から題材を選び、そこに暮らす人々の姿を卓越したストーリー・テラーとしての裁量を十分に発揮しながら、ユーモアに満ちた視線でおもしろおかしく登場人物を描いているからである。²⁾ そして、彼女が生きる指針としているキリスト教信仰については、物語の背景として描かれていたり、瞬間的に信仰のテーマが見え隠れするような手法を用いて、キリスト教の宣伝になるような小説を書くことを避けたのである。³⁾

このようなオコナーの創作における方向は、次のような言葉に示されている。

There are two qualities that make fiction. One is the sense of mystery, and the other is the sense of manners. You get the manners from the texture of existence that surrounds you. (MM, 103)

オコナーの場合には、「神秘」とは、キリスト教信仰における神秘であり、「風俗」とは、ジョージア州に暮らす人々の姿であった。この2つの要素を作品の中で融合させ、オコナー・ワールドとも呼べる独特の世界を創造し、多くの読者を魅了した。

しかし、オコナーの初期作品を再読してみると、当時はむしろ「神秘」の概念は余り見られず、

「風俗」の概念が作品世界を占めているように感じられる。このことから、オコナーは、小説を書き始めた頃は、敬虔なカトリック教徒である自分の立場を、作品に影響させようという考えは、余りなかったのではないと思われる。本稿では、オコナーの修士論文として提出された6つの短篇を再読して、彼女の創作における基本テーマといえる「神秘」と「風俗」のうち、初期では、「風俗」が大きな幅を占領していたということを示したい。また、修士号を取得してから数年後には、彼女の父の命を奪った紅班性狼瘡という不治の病に自ら襲われたことを契機に、彼女の作品に「神秘」が散りばめられるようになり、2つの概念が力強く融合した数々の作品を生み出していったのではないかと考える。さらに、初期作品で習作であることから、批評家たちからもほとんど論じられることのないこれらの短篇が、文章の未完成な点はあるけれども、オコナーが後に本格的に取り上げていく重要なテーマがすでに書かれていることから、決して無視できない一連の作品になっているということを論じたい。

1) "The Geranium" 「ゼラニウム」

オコナーは、1925年にジョージア州の海辺の町、Savannahで生まれたが、13歳のとき、父親の病気の療養もあって、母方の親族が住むジョージア州中部にある Milledgeville に移った。1941年、オコナーが16歳のとき、父は膠原病の一種である難病、紅班性狼瘡のために帰らぬ人となった。以後、オコナーの作品の中に繰り返し描かれる、農園を一人で経営する未亡人と母の生き方に不満を抱くインテリの娘や息子という家族構成のモデルになっているように思われる、母と2人の生活が始まる。

オコナーは、1942年に Peabody High School を卒業し、地元の Georgia State College for Women に入学して、社会学を専攻する。入学後には、学生新聞や学生年鑑、文芸誌にエッセイ、詩、評論、漫画、短編などを投稿したという。1945年、オコナーは、社会学で学士号を得て、ジョージア州立女子大を卒業する。彼女は、初めて母と暮らした南部の家を出て、State University of Iowa (現 University of Iowa) の大学院に進学し、創作科で学ぶ。Paul Eagle の指導を受け、学生時代から雑誌に作品を発表していた。オコナーの初期作品の中では、最初に書かれたとされる、この「ゼラニウム」と題された短篇小説も、1946年2月に *Accent* という雑誌に投稿されたのだが、その結果、アクセントに評価され掲載されることになった。以後、彼女の学部時代の母校となるジョージア州立女子大にある図書館、Ina Dillard Russell Library は、オコナーのその後の活躍を予測したのか、彼女の作品を集め始めたという。⁴⁾

本作品を含む6つの短篇小説が、翌年1947年に修士論文として提出されて、アイオワ州立大学から修士の学位を受ける。「ゼラニウム」の主人公は、Old Dudley と記される老人である。彼は、南部の片田舎で老人専用の食事つき下宿屋に部屋を借りて住んでいたが、ニューヨークの狭いアパートに暮らす娘に引き取られて新しい生活を始める。しかし、毎日何もすることがなく、娘や義理の息子にやっかい者扱いされる暮らしを嫌になる。唯一の楽しみは、向かいの部屋の窓に毎日出されるゼラニウムを眺めることである。ニューヨークのゼラニウムは、故郷のゼラニウムに比べれば、全く美しくなく、故郷にいたとき「小児麻痺で、毎朝車椅子で連れ出され、日向に置かれてまぶしそうにしている」⁵⁾ 近所の男の子を思い出させるのだ。

オコナーは、このように、故郷南部のゼラニウムの美しさを形容するために、ニューヨークのゼラニウムを、故郷で見かけた歩行できない小児麻痺の男の子にたとえている。この、読者にとっては、グロテスクとも思える描写法は、後のオコナーの作品で頻繁に使われることになる。⁶⁾ 前述したように、オコナーの初期作品に垣間見ることのできる様々な技法は、後の完成度の高い作品で円熟味を増してくる。このグロテスクとも言える比喻などについては、オコナーは、次のように述べ、

キリスト教信仰を共有しない現代の読者に彼女の伝えたいことを理解してもらうためのものであり、「ショック療法」とも言える技法を採択しているのだと自ら分析している。

The novelist with Christian concerns will find in modern life distortions which are repugnant to him.....he may well be forced to take ever more violent means to get his vision across to this hostile audience.....then you have to make your vision apparent by shock—to the hard of hearing you shout, and for the almost-blind you draw large and startling figures. (MM, 33-34)

このショック療法的な語りの激しさが、後の作品では、度合いを増してくることが確認できるのは、オコナーが死の直前に書いた、「ゼラニウム」に酷似してる短篇 "Judgement Day" においてである。「ゼラニウム」は、老人が毎日眺めるのを楽しみにしていたゼラニウムが高層のアパートから階下に落ちて粉々になるという結論で終わっているが、「よみがえりの日」は、故郷に帰りたいと熱望する老人が家出を試みるが失敗し、廊下の手すりの柱から頭と両腕を突き出し、両足は階段の吹き抜けからぶら下がったままで死んでいる姿を娘が発見するという結末になっている。警官たちが、のこぎりを使って老人を手すりから引き離す場面や、娘がニューヨークに父の遺体を埋葬するが、不眠症に陥り、父の改葬をする決心をし、棺を掘り返して故郷に送ったために安眠できるようになるという展開からも、グロテスクな描写に磨きがかかっていることが知れる。

「ゼラニウム」の老グッドリーが故郷を思って懐かしむのは、花ばかりではない。老人の暮らす老人専用の食事つき下宿の地下室に住み、食事を作ってくれる Lutisha と、掃除と菜園の世話をしてくれる Rabie という黒人たちのことが忘れられない。ニューヨークでは、グッタリと元氣のないゼラニウムが毎日おさなりに窓の外に出されているのを見て、老人は「ルティージャなら、あのゼラニウムを鉢から土に移植して、・・・ちゃんと見られるようにしたてあげるだろう・・・向かい側のあの連中ときたら、花の扱いかたも知らない」と思う。そして、主従の関係を超えて親友ともいえるような緊密な交際をしていたレイビーのことを何かにつけて懐かしく思い出すのである。年金と手間仕事をして、レイビーと楽しく自由に遊び歩いていた故郷での生活が忘れられない。老人は南部の光景を思い浮かべる。

The window in that room showed him the river—thick and red as it struggled over rocks and around curves.....He and Rabie had fished it in a flat-bottom boat every Wednesday.....He [Rabie] loved the river.....Rabie didn't care much about catching them—he just loved the river.⁷⁾

ここでは、川をこよなく愛し、自然と一体となっているような黒人をオコナーが暖かい眼差しで描写している。

このように、オコナーは南部の田舎で純朴に暮らす黒人にやさしい目を向けている。しかし、オコナーの作品には、南部では会うことのできない、都会で白人と同様の暮らしをしている黒人も多く登場する。この「ゼラニウム」でも、老グッドリーが娘一家と暮らすアパートの隣に都会風に洗練された黒人が引っ越してくる。老人は、この黒人が隣人に雇われていると誤解し、25セント硬貨を握って、この黒人に小遣いとしてやれば、レイビーと同様に遊び仲間になってくれると期待する。娘から、この黒人は白人の雇われ人ではなく、きちんと隣に居住する人なのだから、めんどろを起こさないようにときつく叱られる。すると、老人は、「おまえをそんなふう育てたお婆えはない！・・・おれたちと対等だと思っているような黒人と隣り合って暮らす、そういう育ちはしていないは

ずだ」と激しく怒る。

ここで、オコナーが生まれ育ったアメリカ南部における当時の黒人の立場はどのようなものであったのかという点について検討したい。「ゼラニウム」は1946年に書かれているのだから、アメリカの人種問題の歴史的転換点ともいえる1954年のブラウン判決より8年も前である。この年、連邦最高裁が、「公立学校に黒人と白人の分離教育は憲法違反である」との画期的判決を下したことの意味は大きい。しかし、周知のように南部の白人は「人種統合」(racial integration, racial desegregation) 実施に対して執拗に抵抗し続けるのだ。⁸⁾ このような環境下でオコナーがどのような思想を抱いていたのかは不明である。しかし、「ゼラニウム」やその後の作品でも描かれる白人の友人としての素朴な黒人の姿から、オコナーが黒人に友好的な態度で接していたことが想像される。オコナーは、エッセイの中で南部の黒人について次のように述べている。

The uneducated Southern Negro is not the clown he's made out to be. He's a man of elaborate manners and great formality, which he uses superbly for his own protection and to insure his own privacy. (MM, 234)

ここには、オコナーの黒人に対する理解や尊敬の念が感じられる。一方で、オコナーは、老ダッドリーの都会で暮らす黒人への時代錯誤的な態度を批判しているのではないだろうか。このようなテーマは、その後の作品の中でも繰り返し取り上げられている。例えば、"The Artificial Nigger" の Mr. Head や "Everything That Rises Must Converge" の Julian の母親が、いつまでも黒人を差別し続けようとした典型的な南部白人として描かれている。

批評家の中には、オコナーを南部の黒人問題を描くことはできていない作家であるとか、人種差別主義者であると指摘する声もある。しかし、オコナーが1949年に出会って以来、親交を結び、彼らのコネティカットの家に同居をした、Sally and Robert Fitzgerald 夫妻のサリー・フィッツジェラルドは、このような批判については、激しい口調で反論を繰り返した。例えば、1994年のオコナー没後30年祭りや、1995年のオコナーが生存していれば70歳になっていたという祭りでの基調講演においても、オコナーは「決して人種差別主義者ではない」と明言した。⁹⁾ オコナーは、南部に住む白人として、黒人差別問題について彼女なりの方法で作品の中で言及し続けていたように思われる。1964年、オコナーが永眠した同年に、公民権法が成立し、人種差別は連邦法で禁止されることになる。オコナーが60年代から一気に加速する黒人や女性たちを含むマイノリティたちの人権回復運動について、今も生存して作家活動が続けていたらどのように作品で描いたのであろうかと思えば感慨深い。

「ゼラニウム」は、このように南部の生活をひたすらなつかしみながら、ニューヨークで娘と暮らしている老人の数日を描いたものだが、親子間の断絶、都会と田舎の対比、黒人に対する新旧の考えなど以後のオコナー作品で繰り返し扱われるテーマを含んでいる点で、初めて書かれたという新鮮さをも加え、魅力ある作品になっている。

2) "The Barber" 「床屋」

1947年6月、修士論文の中で「ゼラニウム」に続く作品である。"It is trying on liberals in Dilton," (CS, 15) 「ディルトンでは、自由主義でいるのはなかなか大変だ」という、簡潔で小気味良い出だしで始まるこの短篇は、南部で黒人擁護派であることの難しさを描いているものである。主人公の大学教員、Rayberは、民主党の白人直接予選会のあと、不愉快なことがあって床屋をかけることになる。そのいきさつが、この短篇で語られるという内容になっている。数週間前、床屋

に行ったとき、主人から「誰に投票するのか」と聞かれ、"Darmon" に、と答えると、即座に "You a nigger-lover?" と返答される。さらに、".....get us a man can put these niggers in their places. Shuh," 「黒いやつらをちゃんと分相応のところにいさせる人をつかぎださなくちゃ、」と攻撃される。この主人は、このようなひどい差別発言を大声でしながらも、従業員のGeorgeという黒人少年に「おい、聞こえたか」といちいち確認するという陰湿さもあわせ持つ。

このような状況下で、Rayber は、Jacobs という大学教授の友人が、黒人の大学で1週間講義をしたときの話を思いだす。その友人が、大学では、ニグロや有色人種と言うことは禁止されていて、そのために、ストレスを感じたのか、彼は、自宅に帰ると毎晩「ニガー、ニガー、ニガー」と裏側の窓を開けてどなったというのだ。したがって、レイバーも、リベラルを気取っているものの、胸中は複雑であったのかもしれない。この政治的な討論の結末ははっきりしないまま終わるのだが、二度目に床屋に行ったときに、主人は再び「まだダーモンを指示してるんですか？」と聞いてくる。しかも、もう一人の男が論争に加わる。「教室の後ろのほうに黒い顔の学生が2, 3人いたら、あんたはどう思う？」とその男に詰め寄られて、レイバーは、「一瞬唖然とする」のだ。ここには、オコナーがその後の作品で繰り返し描く、インテリでリベラルを心情とする若者たちの心の奥底にある差別感情を暴き、彼らの偽善的な態度を批判している姿勢がうかがえる。

あくまでも、表面上は、リベラルでありたいと願うレイバーは、使用人の黒人少年が聞いていることを意識して「学習する気のある人になら、白人でも黒人でも、喜んで教える」と答える。しかし、その後も床屋の主人や別の男に言い寄られて、レイバーは返答に困り、「来週またここに来る。そのとき、ダーモンに投票するわけを、いくらでも話してやろう」と及び腰になってその場を去る。三度目には、レイバーは、約束に従って、自分の主張を原稿にまとめたものを用意して床屋やその男に聞かせてやる。最後には、レイバーは自ら気分が高揚したのか、「おまえたちのにぶい頭をかえるつもりでやったとでも思っているのか？・・・おまえたちのどうしようもない無知に干渉するとでも思っているのか」と、床屋の肩をつかみながら叫ぶ。

最終場面は、せっけんの泡をつけ、ひげを半分剃り残したレイバーが、そのままの姿で太陽が照りつける外に出て、「せっけんの泡がシャツの襟の下に流れこみ、散髪用の覆い布がひざまで下がってきた」という描写で終わる。この「床屋」では、新しい南部において白人と黒人がどのように共存していくべきなのかを、大学教授から床屋にいたるまでが論争を展開する。このように、当時の南部では、この白人と黒人の関係のありかたという問題が、いかに深刻であったのかうかがえ、大変に興味深い。

オコナーがストーリー・テラーとして卓越していると思われる点は、黒人差別主義者の床屋や、リベラルを演じながらも心の葛藤に悩むレイバーという主人公たちの姿より、ほとんどセリフも与えられていない黒人の少年の印象が鮮明に読者に残るようにしているところではないだろうか。彼は、"a trim-looking boy" 「すっきりした様子の少年」と形容され、雇い主の床屋が、「おまえ、白人の学校に行くとしたらどうだね？」と怒鳴ると、「行きたくないです」と答え、「もっとパウダーが要ります。この箱のはなくなりました」と何事もなかったかのように仕事に戻るのである。

さらに、この少年の演じる役割の重要性を示唆している描写がある。レイバーが、自分の演説をジョージにも聞かせたいと床屋に言うと、床屋は次のように語る。

"He can hear," the barber repeated. "He can hear what he hears and he can hear two times that much. He can hear what you don't say as well as what you do. (CS, 24)

このように「あんたがやることを通して、あんたが言わないことまでききとれるんだ」という床屋の黒人少年に対する指摘は、的を射ている。すなわち、この口数の少ない少年は、リベラルと主

張するレイバーの偽善的な態度を見抜くことのできる力を与えられているのである。

「ニガー」という差別発言は、"The Artificial Nigger"という短篇小説のタイトルにまで採択され、他の作品でも頻繁に使われていることから、彼女を人種差別主義者のように思う批評家や読者もいるだろう。しかし、「ゼラニウム」を論じたときに指摘したように、オコナーの黒人への眼差しは暖かいように思われる。実際、オコナーに関するさまざまな学会では、必ず講演を依頼される著名なオコナー学者である、Ralph C. Woodも次のように語り、黒人たちもオコナーの自分たちへの視線を理解していると述べている。

.....my black students like her treatment of blacks; they do not find any racist condescension at all in her work. They're especially taken with Randall and Morgan They think she has really caught not only the accents but the wonderful black ability to "signify," as the blacks say, to articulate one thing and mean something quite different than the words indicate. So I think she is not a woman who misunderstood black consciousness or could not inhabit the black mind. She captures the quality of black character and speech very, very well.¹⁰⁾

オコナーは、南部で生まれ育ち、彼女の母親が経営した農場にも多くの黒人が雇われていたようである。従って、黒人とは幼い頃から交流していたに違いないし、南部における黒人の将来についても彼女なりの主張があったことだろう。オコナーの作品には差別的な発言も多く、一見、人種差別主義者のように思えることもある。しかし、「床屋」における寡黙な黒人少年の描写にも、彼女が決して人種差別主義者ではなかったということが言えるのではないだろうか。

3) "Wildcat" 「オオヤマネコ」

修士論文、3つめの短篇である。良くわかりにくい作品であるが、やはり南部の黒人が多く登場するので、彼らの特徴あるスピーチが生き生きと描かれていて、魅力的な世界が展開する。主人公はOld Gabriel、彼は幼い頃から盲目であったが、そのためか臭覚が人一倍冴えている。少年の頃に「においでわかる」彼が、近所を荒らしていたオオヤマネコを捕獲し、そのときの武勇伝が老ガブリエルの回想場面として述べられる。

冒頭、老人の身の回りの世話をして、話し相手となってくれている黒人4人が登場する。彼らは、「じいさんはオオヤマネコを何匹やっつけたことがあるんだ？」と問いただした後、近所迷惑になっているオオヤマネコを退治しに森の中へ行ってくると老人に告げる。しかし、誰もいなくなった老人の家の周りに「子供の時に知ったのと全く同じにおい」がして、老人は近くにオオヤマネコがいると察知する。その影におびえる老人は次のように思う。

"Lord waitin' on me," he whispered. "He don't want me with my face tore open. Why don't you go on, Wildcat, why you want me? "Lord don't want me with no wildcat marks." Across on the river bank the Lord was waiting on him with a troupe of angels and golden vestments for him to put on and when he came, he'd put on the vestments and stand there with the Lord and the angels, judging life. (CS, 31)

「ゼラニウム」と「床屋」では、オコナーが生きる指針としているキリスト教や神への信仰に対する言及はされていない。しかし、この「オオヤマネコ」では、上記のように、自分の顔が引き裂か

れてしまったら、神様は嫌がるだろう、金の衣を用意して待っていてくださるのだからと、老人がオオヤマネコに、自分を襲わないでくれと嘆願している。

やがて、老人の近くにいたオオヤマネコは、老人ではなく雌牛を襲って立ち去るために、老人は助かり、安心してそのまま眠る。翌朝は、再び、黒人たちが老人のために朝食を準備してくれている場面となり、黒人たちに今夜こそ、再びオオヤマネコが自分の周りにやってくると伝えるのだが、誰にも相手にされないという描写で物語が閉じる。このように、ストーリー自体は死期が近づいていることを予測する盲目の老人と、彼の世話をする黒人とのオオヤマネコ狩りについての掛け合いが語られ、また、オオヤマネコがうろつくという、都会では見ることのできない南部の未開の自然が描かれており、魅力的な短篇になってはいるが、読者に伝えたいメッセージは何なのかが余りはっきりしないという不満が残る。

しかし、後になって、短篇では散見され、長編では主人公たちが全身全霊で立ち向かっていく信仰の問題が、老人の単純な思考や死に対するイメージを通じてではあっても、彼の「神」と対話する姿勢に初めて描かれている点では、「オオヤマネコ」も大切な初期作品の1つであると言える。

4) "The Crop" 「収穫」

本短篇は、修士論文4つめの作品であるが、1946年の2月に、「ゼラニウム」と一緒に、文芸誌の『アクセント』に投稿された。したがって、「ゼラニウム」と同様、オコナーが最初に発表した作品となる。この短篇は、主人公の Miss Willerton を作家志望に設定しており、彼女が小説の主題を何にして、それをどのような手法で書こうかとあれこれ悩む姿を描いている。そのため、この主人公に、作家本人であるオコナーの姿が重なって見えてくる点で興味深い作品になっている。また、60年代に花開くマイノリティの権利獲得運動の中では、黒人のみならず女性が運動の中心をなしていき、フェミニズム運動が様々な分野で活発になっていくのであるが、その萌芽のようなものも描かれている点が注目に値するように思われる。

オコナーの中期の作品群の中では、"Good Country People" の Joy という32歳で独身の主人公が、親から与えられた名前を、「いちばん嫌な音の名前を選んだに違いない」と母親に思わせるような Hulga という名前に変え、反抗的に生きる姿に、フェミニズムの視点を垣間見ることができる。彼女は、哲学の博士号をもち、母親や近所の人たちを軽蔑して生きている。食事の最中に、突然母親に向かって、「女よ！あんたは自分の内面を見たことがある？」と食ってかかる始末である。このように傲慢な態度をしている彼女が、結末では、純朴そうな聖書売りの青年に騙されて自分の義足を奪われてしまうのだが、ハルガの母親に対する叱責のせりふの中に、女性の生き方についてのオコナーの問いかけがなされているように思われる。

「収穫」のミス・ウィラトーンは、家事の合間に小説を書いている。少しでも時間が空くと「さあ、終わった。タイプライターに取りかかれる。昼食までずっと書いていられる」と思うほどに、小説を書くことが好きである。また、オコナーが自分の姿を、ユーモアを交えて揶揄しているように感じられ、楽しめる場面がある。例えば、ミス・ウィラトーンは、朝食のパンくずを払った直後には、小説の主人公を「パン職人」にしようかと考えるが、「いや、パン職人ではだめ。色どりがたりない。パン職人をめぐるって社会的緊張関係はつくれない」と思い、社会問題ならば、「農作業の季節労働者がいい！」と結論したりする箇所である。

ミス・ウィラトーンのあれこれ悩む場面はおもしろくて、読者を引き込む。

But a sharecropper, she knew, might reasonably be expected to roll over in the mud.....
Having him do that would give more point to the hookworm, too, she decided.....There

would have to be some quite violent, naturalistic scenes, the sadistic sort of thing one read of in connection with that class. (CS, 36)

「季節労働者といえば泥の中をころげまわることが期待されるのだ・・・主人公を泥の中でころげまわらせれば、さらに大きく読者の気をひけるだろう・・・とても暴力的で自然主義的な場面がいくつか必要だ。」

このように想像力をたくましく働かせるのだが、結局、彼女は「家族がもし読んだらなんと言うだろう」と思ってしまうのである。そして、小説の主人公である季節労働者は「結局、彼は犬といっしょに泥の中をころげまわったりしないほうがいいかもしれない」と結論づける。

「収穫」のミス・ウィラトーンは、作家志望という設定において、まさにオコナー自身の創作の過程をうかがうことができる唯一の主人公である。たしかに、オコナーが書く短篇や長編小説が、その内容や言い回しが決して穏やかなものではなかったために、南部の淑女そのものであったと言われているオコナーの母親や親戚の人たちから、反発をかったらしいということは一般に知られている。しかし、オコナーは、ミス・ウィラトーンとは違い、自分自身が書きたいことを書くという態度を貫いたように思われる。

前述したように、「収穫」には、フェミニズムの視点を垣間見ることができる場面がある。それは、ミス・ウィラトーンが、大好きな小説を書くという作業を中断し、スーパーマーケットに買い物に出なければならない箇所である。彼女はスーパーにいと「なぜか気が沈む」のだ。

.....nothing in it but trifling domestic doings—women buying beans—riding children in those grocery go-carts—higgling about an eighth of a pound more or less of squash—what did they get out of it? Miss Willerton wondered. Where was there any chance for self-expression, for creation, for art? All around her it was the same—sidewalks full of people scurrying about with their hands full of little packages and their minds full of little packages—that woman there with the child on the leash, pulling him jerking him, dragging him away from a window with jack-o'-lantern in it; she would probably be pulling and jerking him the rest of her life. (CS, 40)

「ごくつまらない日常的行動しか、そこにはない。女たちが豆を買ったり、子供がゴーカーに乗って走ったり、カボチャが50グラム多いとか足りないとか騒ぎたてたり、そんなことからいったい、なにを得るといえるのか、ミス・ウィラトーンは不思議に思った。自己表現、創造、芸術のための機会など、まったくないではないか、まわりもすべておなじことだ。横町は手に買い物をもった人であふれ、誰もが手にした荷物のことしか考えていない。子供につけた革ひもを引っ張って、祭りのカボチャ提灯を飾ったウィンドウから引き離している女。きっとこれから先も一生、子供を押したり引っ張ったりするにちがいない」

少々長い引用になってしまったが、ここには、女性の単調で無目的な人生に警告を与え、「覚醒」を促しているようなオコナーの主張が感じられ、女権獲得運動が盛んになるはるか以前からこのような立場で作品を書いていたオコナーの作家としての力量に敬服する。

「収穫」の最終場面は、ミス・ウィラトーンが、買い物という家事から開放されて再びタイプライターの前に座り、主人公を季節労働者ではなく、「アイルランドなまりはとても音楽的だし、それにアイルランドの歴史はすばらしい！」から「アイルランド人がいい！」と何の脈絡もなくアイ

ルランド人にしようと明るく考える姿で終わる。このように、小説家志望の女性の創作過程をユーモアを交えて語るオコナーではあるが、1940年代という早い時期、しかも旧態然としている南部という環境下で、新しい女性の生き方というものについての主張を、初期の作品で示していたことに注目したい。

5) "The Turkey" 「七面鳥」

この短篇は、修士論文5つめの作品である。6つの初期作品の中では、「オオヤマネコ」とこの「七面鳥」が、オコナーが後の作品で常に読者に問いかけてくる、神と人との関わりについて示唆している部分がある。「オオヤマネコ」では、盲目の老人、老ガブリエルがオオヤマネコに顔を引き裂かれたら、天国で待ち受けてくれている神に会わず顔がないと怯える場面に、少しだけはあるが、神が登場する。この「七面鳥」の主人公は、11歳の少年、Rullerである。ララーが、ある日、子供なりの単純な考えの中で神と短い対話を交わし、彼なりに神の存在を意識する場面で物語が終わる。

ララーは、中期のオコナー作品群の中に登場することの多い一風変わった少年の一人である。両親は、毎晩、ララーと4つ年上の兄、Haneについて、二人が眠ってしまってから寝室で話し合っている。ヘインはぐっすり眠っていて気づかないが、感受性の鋭いララーは、「毎晩、両親の話に聞き耳をたてる。」父親が一人遊びばかりしている自分のことを心配しているのを知って、ララーは、両親に誉められるようなことをしようと考え、野生の七面鳥を捕まえることを思いつく。この七面鳥や、オオヤマネコ、そして老ダッドリーがなつかしむ南部の生き生きと咲き乱れるゼラニウム、そして「収穫」にも「ペチュニアが咲きほこり、窓の下ではキンギョソウが群れ咲いていた」という描写があることから、オコナーが自分の生まれ育った南部の動物や植物を深く愛していたことがわかる。南部の自然風景は余りに豊かで、オコナーは、南部には神が遍在しその恩寵を受けているように感じていたのではないかと思える。¹¹⁾

このような観点からララーもまた、七面鳥を探しに出かける南部の森で神の姿を垣間見ることになる。ララーは、一度捕まえそうになった七面鳥に逃げられ、ふてぶてしい態度に陥る。兄のヘインが以前、「神さまのばか!」と言ったとき、母親が、「そういう言葉は二度とききたくないわ。主なる汝の神の名をいたずらに口にすべからず、ですよ。わかった?」と注意したことを思いだしたが、自分は母親から何も禁じられていないと解釈し、「神さまのばか!」と言ってみる。さらに、恐る恐るララーは神へ悪態をつき、何か起きてしまうかどうかチェックする。

"God dammit," he said softly. He could feel his face getting hot and his chest thumping all of a sudden inside. "God dammit to hell," he said almost inaudibly. He looked over his shoulder but no one was there. (CS, 46)

このように、ララーは、「神さまのくそったれ」と言うと、顔が熱くなり胸がどきどきするのだ。さらに「肩越しに後ろを見て」、誰かが自分を戒めに来たのではないかとチェックする。ララーのような思春期の少年や少女が、神という存在について子供なりのやり方で考える様子がオコナーの作品では描かれることが多い。両方とも名前が与えられていないが、"A Temple of the Holy Ghost" と "A Circle in the Fire"に登場する女の子たちが、ララーのように、幼いなりに神の大きな力のようなものを感じることができるという役割を与えられている。

ララーは、悪態をついても何も起きはしないと確認したので、その後も神をののしるような言葉を繰り返しては、一人、「げらげら」「ひいひい」笑い転げる。しかし、この感受性の強い少年は、

かつて聞いたことのある、牧師の説教をも思い浮かべる。「今の時代は、青年たちが大挙して悪魔の導く方に進んでいる。まっとうな道を離れ、サタンが用意した道をたどる。後で後悔するのだ・・・泣き、歯がみして悔いるのだ」という言葉を思い出すが、彼は、「男は泣いたりしない」と強気になって自分を肯定する。この少年が神を肯定するか、否定するかどうかで迷う姿が、「神さまのばか、・・・午後中追いかけさせて、無駄骨を折らせるなんて」と恨みを述べながらも、すぐに「神さまのことをそんなふうに思うのはよくないけど」と、少年らしい純真な心を見せるところに表れている。

そこへ、少年が信じられないようなことが起きる。誰かに撃たれて、怪我をした七面鳥が自分の目の前で倒れていたのだ。少年は、「これは、ぼくが悪い道に進むのを引き止めるためなのだ。神さまがぼくを引きとめようとしているのだ」と感じる。「神さまはぼくが説教師になることをお望みなのかもしれない」とさえ思う。そして、4キロ以上もある七面鳥を肩にかついで岐路につく。帰る途中、大勢の人から声をかけられ得意になり、「全身が温かくていい気持ち」になる。そこへ、田舎の少年たちが後をつけてくるのに気づく。小作人の息子たちだとわかり、神に感謝の印として、「小作人の息子たちの収容施設をつくってやってもいい」とか、誰かに施しをあげたいからと、物乞いに会わせてくれと神に願う。するとちょうど物乞いも現れ、少年は10セント硬貨をむりやり相手の手にねじこんだりする。

ラーは、全てが望みどおりになるので有頂天になって「みんな、この七面鳥を見たい？」と田舎の少年たちに声をかける。しかし、ラーが予期しなかったことが突然起きる。少年の一人が、七面鳥を自分の肩にかついで、仲間と一緒に立ち去ってしまうのだ。ラーは、ショックからしばらくは、動くこともできなかったが、何が起きたかを認めた頃には、回りはすっかり暗くなっていたので、走って家に帰る。大急ぎで走ったので、心臓が足の動きと同じくらいに早くなっているのに気づく。本短篇の最後は次のような文章で締めくくられる。

.....he was certain that Something Awful was tearing behind him with its arms rigid and its fingers ready to clutch. (CS, 53)

「今にもつかみかかろうと指をかまえて、おそろしいなにかが後ろから迫ってきていた」ことをラーが確信するという、この最後の文章が読者にどのようなメッセージを伝えたいのかは不明である。しかし、ラーは、神という存在の不可思議さをも学んだのではないだろうか。

オコナーは、"The Fiction Writer and His Country"というエッセイの中で St. Cyril of Jerusalem の次の言葉を引用している。

The dragon sits by the side of the road, watching those who pass. Beware lest he devour you. We go to the Father of Souls, but it is necessary to pass by the dragon.

(MM, 35)

読者に「じっと見ている竜がいる、この竜に食い殺されないように注意せよ」と警告するオコナーは、時として、少年や少女にこの竜の存在を知らしめようとすることがある。そして、オコナーは後の作品で、大人や老人になってもこの竜の存在に恐れを抱かないような登場人物に対して何らかの制裁を加えるようになる。

6) "The Train" 「列車」

修士論文の最後を飾る本短篇は、書き換えられて後、オコナーの存在を一挙に有名にした、衝撃的な長編小説 *Wise Blood* (1952) の冒頭の1章となる作品である。最初に書き始められたのは、修士論文にまとめた短篇と同時期の1946年頃という。1947年には、Reinhart-Iowa Fiction Awardを受賞して、賞金750ドルを受け取る。これによってレインハート社もオコナーの『賢い血』のオプション（選択売買権）を得るが、オコナーは、Elizabeth McKee宛ての1948年6月の手紙で、『賢い血』の出版社を探しているところだと述べている。¹²⁾『賢い血』を書き始めてから約1年半が経っており、あと2年はかかるだろうと予測している。さらに7月のマッキー宛ての手紙には『賢い血』を12章まで、5万語を超えて書いたと述べている。完成した『賢い血』は、14章構成であることから、ほぼ最後まで書き終えていたことになるが、この冒頭の章を分析しても、オコナーは、かなり大幅に内容を変更することも含めて、相当量の書き換えをおこなったように思われる。

1950年、『賢い血』が完成して出版される2年ほど前の暮れ、父親の命を奪った不治の病である紅班性狼瘡の最初の兆候がオコナーを襲う。以後、オコナーが他界するまでの約15年間、彼女はこの病気と壮絶に戦いながらも執筆を続けていく。前述したように、オコナーは敬虔なカトリック教徒であるから、神の存在や人間の生と死という問題についても常日頃から思考をめぐらしていたであろうことは予測される。しかし、彼女が一層真摯にこのような問題について考えるようになったのは、やはり、自分自身が不治の病に襲われ、死が現実のものとして迫ってきたからなのではないだろうか。

このことが的確に感じられる点が2つある。1つは、彼女の提出した6つの修士論文においては、神との対峙をする老ガブリエルや少年ラーを除き誰も神について言及してはいないことである。そして、もう1つは、オコナーの中後期の短篇や長編では、多くの登場人物が死を迎えることになるのだが、この修士論文においては誰一人として死と直面したりはしていないことである。

『賢い血』の冒頭の章となるこの「列車」においても特筆すべきことは何も起きないのである。主人公の名は、あの『賢い血』で衝撃的な最後を迎え、その異様な行動に読者が戦慄を覚えるHazeと同じである。¹³⁾もちろん、このヘイズの行動も尋常ではないが、読者が目をそむけたくなるほどの行動に及ぶことはない。ただ、乗車した寝台車のポーターである黒人が、自分と同じ南部出身でテネシー州、Eastrodという同じ町から来ているに違いないと思い込み奇妙な態度に出る。

故郷をひたすらなつかしむヘイズは、異様な彼の様子に不可解な表情でとまどう黒人に執拗に迫る。しかし、ヘイズの期待を裏切って黒人は南部出身ではなくシカゴから来たと答える。ヘイズは落胆しながらも乗り合わせた婦人に誘われて食堂車に行く。その食堂車の中では、長編の場面と同じく田舎者のヘイズのマナーの悪さがユーモアを交えて描かれている。ヘイズは、ポーターである黒人と交流したいという欲求をあきらめきれずに「あのポーターは溪谷地帯の黒人の親戚かもしれない・・・イーストロッドに親戚はいないかきいてみよう」と思う。

列車の通路を突進したヘイズは、このポーターと正面衝突してしまう。2人が倒れたまま顔をつきあわせたとき、ヘイズは、この黒人に似ている故郷の男の名で呼びかけるのだが、黒人は無視して立ち上がり、足早に通路から去ろうとする。ヘイズは、故郷にいた黒人の家出した息子なののだと思い込み、「イーストロッドを知っているのだが、そこが好きではなく、そこの話をしたくない」のだと考え、ポーターに、執拗に、故郷の黒人は、豚のコレラに感染して死んだこと告げる。

しかし、「おれはシカゴ生まれだ。父親は鉄道員だった」と相手は答える。ヘイズはオコナーの作品によく登場する黒人の人間的な権利を認めない、南部の保守的な老人たちの若者版とでもいえる人物であるから、「黒人が[鉄道員]だ」と相手は嘘をついているのだと馬鹿にして笑う。そし

て、このポーターの父親であるに違いない故郷の黒人は、息子が「白い制服なんぞ着こんで」と落胆さえるだろうと思う。ヘイズは、ジョージア州の軍隊に所属していた青年で、故郷に帰ってみるとイーストロッドは、荒廃していた。トーキンハムの姉のところへ行く予定だったが、予定を変えて、故郷へ戻ってみたのだが、たった2つの家族は町へ移住し、黒人たちもいなくなっていた。ヘイズは、寝台車に横たわりながら、棺の中に眠っていた母親のことを思い出す。母親は、棺から飛び出すつもりだったようにも思えてくる。このようなヘイズの思いが、寝台車で眠る彼の夢の中の出来事であるかのように描かれてこの『賢い血』の冒頭の章は終わる。

しかし、一見余り書き換えられてはいないと思える完成作品としての『賢い血』の1章と、この「列車」には、決定的な違いがある。それは、『賢い血』では、主人公のヘイズが、乗り合わせた婦人の乗客に Taulkinham に行つて、説教師になるのだという自己の明確な目的を告げることである。そして、彼女に唐突に "I recon you think you been redeemed,"¹⁴⁾ という極めて宗教的な質問を繰り返すところである。さらに、彼は食堂車で居合わせた女性にも "Do you think I believe in Jesus?.....Well, I wouldn't even if He existed. Even if He was on this train." (WB, 13) とより宗教的な発言をするのである。

さらに、「列車」では、一度も触れられていないヘイズの祖父が、巡回説教師であり、その影響でヘイズが "the way to avoid Jesus was to avoid sin" と思い込み、軍隊で仲間から売春宿に誘われても頑なに拒否したことが示されている。また、このヘイズは、軍隊に持って行ったものは黒い表紙の聖書と母親の形見である銀縁の眼鏡だけであったと記されている。したがって、ほとんどキリスト教における神の存在は皆無であった「列車」が、『賢い血』においては、宗教色が全面に押出されるようになっていることがわかる。

以上、オコナーの修士論文として提出された6つの初期短篇を再読した。本論で記述してきたように、これらの作品には、南部の自然の風景が描かれ、南部の当時の黒人と白人の状況についての描写があり、さらには、フェミニズムの視点に立って、女性の生き方が論じられ、人と神との関わりについての言及がある。このことは、中後期のオコナー作品の中でより洗練された筆致で繰り返し語られることになる主要なテーマの全てが、初期短篇においてすでに取り上げられており、6つの作品の中に巧みなかたちで、散りばめられていることがわかり興味深い。そして、これらの短篇は、オコナーが不治の病に襲われる以前に書かれていたために、長編『賢い血』でヘイズが狂ったようになって追い求める神との対話というテーマや、短篇で描かれることの多い偽善的な信仰を持っている人間や、人間としての謙虚さを欠いている人間への制裁というテーマは取り扱われていない。

そして、「列車」と『賢い血』の決定的な違いに注目するとき、オコナーの不治の病に襲われたという個人的な体験がいかに大きく彼女の創作態度に影響を与えたかがうかがえる。Evelyn Waugh が, "If these stories are in fact the work of a young lady, they are indeed remarkable"¹⁵⁾ と評したという逸話のある、特異で衝撃的で深みのあるオコナー・ワールドは、やはり、彼女が強靱な精神力を持って、難病と戦いながらも執筆を続けたことと深くかかわっているように思われる。オコナーの死後、40年という月日が流れているが、彼女の生まれ故郷であり、作品の中でその豊かな自然が描かれ続けたジョージア州という場所に残した彼女の軌跡の大きさは、*After O'Connor: Stories from Contemporary Georgia* というある近著のタイトルにもうかがえる。¹⁶⁾

注

- 1) Flannery O'Connor, *Mystery and Manners*, ed. Sally and Robert Fitzgerald (1961; New York: Farrar, Straus, and Giroux, 1984) 32. 以下、MMと省略し、引用は文中の括弧内にその頁数を記す。
- 2) オコナーの卓越した語りについては、拙論、「フラナリー・オコナーの語りの技法——南部の風俗における

- 具体観念」『東京成徳短期大学紀要』第26号（1993年3月）：245—258頁を参照されたい。
- 3) オコナーの作品におけるカトリック教とアメリカ南部の関係については、拙論、「フラナリー・オコナーとカトリック教——南部根本主義との融合」『東京成徳短期大学紀要』第31号（1998年23月）：23—37頁を参照されたい。
 - 4) 野口肇,『フラナリー・オコナーの世界』（文化書房博文社, 1988年）, 186頁。
 なお、筆者は、1994年にジョージア州ミレジブルで開催された、オコナーの没後30年を祝う学会に参加し、ジョージアカレッジの図書館に設けられたオコナーの特別室を見る機会に恵まれた。オコナーの蔵書や彼女が使用していた机やタイプライターを見たときには、感慨深いものがあった。
 この祝祭については、拙論「フラナリー・オコナー没後30年祭」『英語青年』1994年10月号（第140巻第7号、研究社、22-23頁）を参照。
 - 5) 横山貞子,『フラナリー・オコナー全短篇 上』（筑摩書房, 2003年）281頁。オコナー作品の日本語訳については、本著を参考にした。
 - 6) オコナー作品のグロテスクの扱われ方については、拙論, "Sense of Grotesqueness in the Works of Flannery O'Connor—The "Apparent" and the "Real" Grotesque," *The Bulletin of Tokyo Seitoku College* 29 (March, 1996) : 83-98頁を参照されたい。
 - 7) Flannery O'Connor, "Judgement Day," in Flannery O'Connor : *The Complete Stories* (New York : Farrar, Straus and Giroux, 40th Printing, 1996), 4-5. 以下、CSと省略し、引用は文中の括弧内にその頁数を記す。
 - 8) 志村陽一,『異文化社会アメリカ』（研究社, 1999年）, 74頁。
 - 9) このオコナーの生誕70年を祝う"Flannery O'Connor and the Christian Mystery"と題されたユタ州で行われた記念シンポジウムについては、拙論「アメリカと日本におけるフラナリー・オコナー研究——The Flannery O'Connor Bulletinを中心に」『東京成徳短期大学紀要』第30号（1997年3月）：73-82頁を参照されたい。
 - 10) オコナーについての専門誌, *Flannery O'Connor Bulletin* 13 (1984) : 64頁。本誌に掲載されていたパネル・ディスカッションにおける発言。
 - 11) 南部の神が遍在しているような自然については、拙論 "The 'Senses' in the Works of Flannery O'Connor - The South as a Sensuous Region," *The Bulletin of Tokyo Seitoku College* 27 (March, 1994) : 67-85頁を参照されたい。
 - 12) Flannery O'Connor, *Letters of Flannery O'Connor : The Habit of Being*, selected and ed. Sally Fitzgerald (New York : Farrar, Straus, and Giroux, 1980) : 4.
 - 13) 長編『賢い血』については、拙論「Hazeの変容と Enochの役割—— Wise Bloodの考察」『東横学園女子短期大学紀要』第25号（1990年10月）：65-74を参照されたい。
 - 14) Flannery O'Connor, *Wise Blood in Three By Flannery O'Connor*, Signet Classis (New York : The New American Library, Inc., 1983), p. 12. 以下、WBと省略し、引用は文中の括弧内にその頁数を記す。
 - 15) Robert Giroux, "Introduction" in *Flannery O'Connor : The Complete Stories*, xii.
 - 16) *After O'Connor : Stories from Contemporary Georgia*. Ed. By Hugh Ruppersburg (Athens, Georgia : Georgia UP, 2003). 筆者は、2004年の夏、学生を引率してオレゴン州ポートランドに滞在する機会を得た折、著名な本屋であるPowell's Bookstoreで本著を購入した。本著の編者は、Alice Walker が、"the first great modern writer from the South"とオコナーを絶賛していることを述べ、"The typical writer in this anthology was either born somewhere else and then moved to Georgia or was born in Georgia and moved away"(xi)と本著に収められている作家たちを紹介している。